

同志社大学
2016 年度卒業論文

鷹山の復興が与えた影響
—ソーシャル・キャピタルに注目して—

社会学部社会学科
学籍番号：19131045
氏名：西山咲良
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数：20566 字)

第1章 はじめに	1
第2章 先行研究	1
2.1 鷹山の歴史と現状.....	1
2.2 山鉾町で結ばれる関係性.....	3
(1) 祭縁.....	3
(2) アクターネットワークと実践コミュニティ	5
2.3 ソーシャル・キャピタルという概念.....	6
(1) ソーシャル・キャピタルとは.....	6
(2) ソーシャル・キャピタル形成促進要因とは.....	8
2.4 リサーチクエスション	8
第3章 研究方法	8
第4章 調査結果	12
4.1 結果と考察.....	13
(1) ソーシャル・キャピタル形成促進要因について	13
(2) ソーシャル・キャピタル量について.....	15
① 互酬性.....	15
② 信頼	16
③ ネットワーク	19
4.2 「ポジティブ・フィードバック」な関係性.....	21
第5章 おわりに	22

第1章 はじめに

日本三大祭の一つである祇園祭は、京都の夏を彩る伝統的な祭りである。その歴史は古く、今から約 1100 年前に、疫病退散を願い始まった御霊会が起源と言われている。天禄元年（970）から毎年行われるようになったと言われており、今日まで度々中断と復興を繰り返して、続いてきた祭である。祇園祭は7月1日から31日まで1ヶ月間行われる、期間の長い祭りである。その中でも、特に山鉾巡行と宵山は、広く知られており多くの観光客を京都へと呼び寄せる。山鉾巡行は「動く世界の美術館」とも言われ、14世紀の南北朝時代に現在の様に神輿渡御と独立して行われるようになったと言われている。室町時代には山鉾を出す町内も定まり、山鉾も立派になっていくが応仁の乱で祇園祭は中断せざるをえなかった。このころから「町組」という自治組織が結成され、山鉾を復興させ、以後祇園祭は町衆によって支えられ発展していったとされる。その後江戸時代の火災、明治維新の変革などにより山鉾町も被害を受けるが、そのつど祇園祭は復興されていったという。この様に祇園祭の山鉾巡行は町によって支えられ続いてきた祭である。現在、山鉾巡行は33基によって行われており、巡行に参加していない休み山は鷹山と布袋山の2基である。また、山鉾巡行の前の3日間で行われる宵山期間では、各山鉾町が祭礼品授与で粽やグッズを販売したりお囃子の披露をしたりして、宵山を盛り上げている。宵山の準備にあたる粽作りやお囃子の練習、宵山当日の祭礼品授与の売り子、山鉾巡行の山鉾の曳き手、舁き手など、祇園祭は各山鉾町の保存会を中心として、様々な団体や人が関わり協力して行われている。山鉾巡行だけでなく、宵山期間も町を中心にして支えられていると言っていいだろう。

本稿では、山鉾町の中でも数年前から巡行参加を目指し動き始めた鷹山に焦点を当てていきたい。祇園祭は各山鉾町によって支えられてきた祭でもあり、鷹山が巡行を目指し始めたことによって何か町内の人達の関係性に影響を与えたと考えた。ここでは、町内の人達の関係性の変化をソーシャル・キャピタルの概念を使用して、変化があったかどうかを見ることが目的である。本稿の流れとしては、第2章で、鷹山の歴史、祇園祭の山鉾町ではどのような関係性が結ばれていて、どのような特徴があるのかを、後半では、ソーシャル・キャピタルについてみていきたいと思う。第3章では、鷹山の復興による変化を探るために行ったインタビュー調査の概要について述べる。第4章では、その結果を分析し、鷹山の復興が町内の人達の関係性に与えた影響について考察し、第5章で全体をまとめ課題を述べる。

第2章 先行研究

この章では、大きく鷹山の歴史と現状について、祇園祭を取り巻く人々の関係性についてどのような研究が行われてきたか、ソーシャル・キャピタルという概念についてみていきたいと思う。その後に本調査のリサーチクエスチョンを述べていく。

2.1 鷹山の歴史と現状

筆者は2015年7月に後祭の宵山の参与観察と2015年8月に鷹山の復興を中心で進めて

いる人物へのインタビュー調査を行った。それをまとめたのが鈴木佳菜子（2016）である。今回のインタビュー調査と鈴木（2016）を元に鷹山の歴史と現状をまとめていきたい。

まず、鷹山が休み山になるまでの歴史について見ていこう。鷹山は応仁の乱以前から巡行をしていたと記録の残る山である。鷹山は休み山となる前に、応仁の乱、宝永の大火、天明の大火を経験し、大きな被害を受けたがその度に復興してきた。しかしながら、1826年の巡行の大雨により懸想品を汚損したことにより、翌年から巡行に参加しなくなったという。1864年の幕末に禁門の変の大火によって、祇園祭の山鉾のかなりが焼失したことで、明治維新や寄合制度が廃止されたことが重なり、その復興は困難だった。鷹山も御神体の鷹遣いの頭部など計13点のみを残し、焼失してしまった。しかし、その後、明治期にご神体の姿を復元し、現在まで約190年間、町内で居祭を続けてきた。

そして、現在、鷹山は巡行参加を目指し動き始めている。約190年もの間、居祭を続けてきた鷹山がなぜ復興に向け動き出したのかを見ていきたい。下の表1は現在までの鷹山の復興の動きをまとめたものである。

表1 祇園祭と鷹山の歴史

西暦	月日	祇園祭全体の動き	鷹山の動き
1952年		菊水鉾が復興	
1966年		先祭、後祭合同巡行	
1979年		綾傘鉾が復興	
1980年代			町内で復興しようという動きが起こる
1981年		蟻螂山が復興	
1988年		四条傘鉾が復興	
2012年	10月		「鷹山の歴史と未来を語る会」結成
	10月17日		第一回目の勉強会が行われる
2014年		後祭復活 大船鉾復興	
	3月		お囃子の練習を開始
	7月15日	前祭宵山期間	ちおん舎にて公開練習会を行う
2015年	3月		町内でご神体の所有権についての投票が行われる
	5月		「鷹山の歴史と未来を語る会」が一般財団法人「鷹山保存会」に発展
	7月22、23日	後祭宵山期間	お囃子お披露目、祭礼品授与
	24日	後祭山鉾巡行	中御座のお神輿をお迎えする
2016年	1月19日		「一般財団法人鷹山保存会」が公益財団化
	4月		山鉾連合会に準加盟
	6月7日		第一回鷹山調査委員会が開かれる
	7月22、23日	後祭宵山期間	お囃子お披露目、祭礼品授与
	24日	後祭山鉾巡行	中御座のお神輿をお迎えする

鈴木（2016）、毎日新聞、インタビューより筆者作成

1952年に菊水鉾、1980年前後に綾傘鉾、蟻螂山、四条傘鉾が復興を成し遂げた。その流れの中で、鷹山にも復興の動きがあったというが、資金も人も全て町内でまかなおうとしており、この動きは頓挫してしまった。再び復興の流れが来ており、2014年に大船鉾が復興し、後祭が復活した。後祭に属する鷹山にとって後祭の復活は追い風となっているという。

現在の鷹山復興への動きに関してだが、2012年10月に鷹山の復興を目指すものなら町内外を問わずに入会が出来る組織、「鷹山の歴史と未来を語る会」（以下「語る会」と称す）が結成され、現在まで全6回の勉強会が開かれている。そして2014年3月からお囃子の練習を開始した。2015年の復興の動きを、時間軸にそって追っていくと、3月にご神体の所有権を居祭を担当して行っている衣棚町鷹山保存会から移行することに対する是非を問う投票が行われ、5月には「語る会」が一般財団法人「鷹山保存会」へと発展した。この年の祇園祭期間の7月5日から9日まで二階囃子、後祭宵山期間である7月22日23日にお囃子のお披露目と初めての祭礼品授与を行った。二階囃子とは会所の二階でお囃子の練習を行うものであるが、鷹山の場合は会所ではなく、普段のお囃子の練習をしている場所で行った。そこから響くお囃子の音に足を止めて聞き入る人も見られた。そして山鉾巡行の24日の夜、中御座のお神輿を迎えた。祇園祭は山鉾巡行に目が行きがちだが、主役はお神輿であり、そのお神輿のお迎えをできたということは鷹山にとって大きな意味を持つだろう。

2016年も鷹山にとって大きな動きがあったといえるのではないだろうか。1月19日には一般財団法人「鷹山保存会」が公益財団法人の認可を受け、4月には祇園祭山鉾連合会に準加盟することとなった。一般財団法人から公益財団法人になったことと祇園祭山鉾連合会に準加盟したことのメリットは大きく、資金集めがしやすくなる等、様々なことが可能となる。6月7日には、鷹山復興に向けどのように復興をして行くのかを検討する鷹山調査委員会第一回検討会が開催された。この年の祇園祭の期間も2015年と同様にお囃子のお披露目、祭礼品授与、中御座のお迎えを行った。

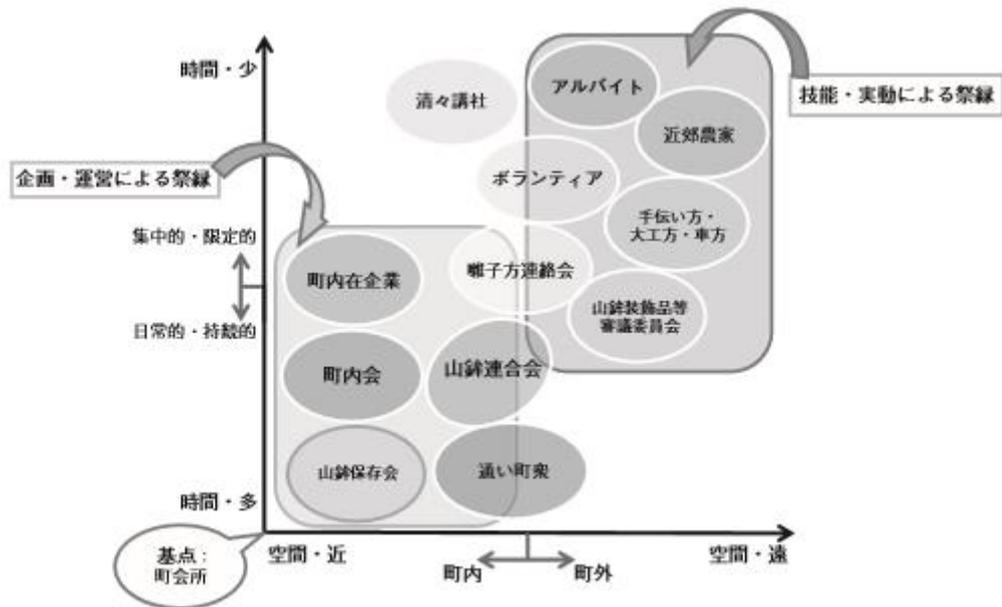
鷹山の復興の動きを簡単に見てきたが、復興の動きが始まったことによって様々な変化が町内に起こったことが分かる。居祭のみを行っていた時にはなかった祭礼品授与やお囃子のお披露目が町内で行われるようになった。さらに「語る会」から始まった公益財団法人「鷹山保存会」や囃子方が出来て、それに参加している人々はよりその変化を体感しているのではないだろうか。そのような鷹山の復興の動きによって町内に生じた変化は、町内の人々の関係性にどんな影響を与えたのだろうかということを本調査では明らかにしていきたい。

2.2 山鉾町で結ばれる関係性

(1) 祭縁

樋口博美(2012)では、山鉾祭礼をめぐる結ばれる社会関係を祭縁として考察し、祭礼に関わる人々や諸集団の概要を図式化している。①祭へのかかわり方、②空間、③時間、④伝統の4つの視点から山鉾祭礼にかかわる人々や諸集団を見ている。①の祭へのかかわり方とは山鉾祭礼の実現と維持において、企画・運営か技能・実働に関わるかどうか、②の空間は祭礼に関わる人々が町会所からどれくらいの距離に生活基盤を置いているか、特に町内かどうかという点、③の時間は祭礼との関わりが日常的・持続的なのか集中的・限定的なのか、④の伝統は祭の維持という大きな目標を達成するために、祭礼をめぐる社会関係の変化を捉えるための視点である。この枠組みを使用し、山鉾祭礼をめぐる人々や諸集団の関係について考察し図式化している。それが以下の図である。

図1 祭縁（山鉾を建て、動かす人々の関係）



（樋口博美，「祇園祭の山鉾祭礼をめぐる祭礼としての社会関係―祭を支える人々―」『専修人間科学論集』，2003年，123ページ 図4）

樋口（2012）の中では山鉾を建てて動かすことをめぐって結ばれる関係に着目していた。しかし鷹山の場合、現在、巡行参加を目指している山であり、建てて動かす前段階にいた状況であり、上のような社会関係が必ずしも結ばれているとはいえない。鷹山はまだ山がなく巡行に参加していない山であるため、技能・実働による祭縁は結ばれていないだろう。しかし、巡行参加に向け、保存会や囃子方が出来、祭礼品授与なども行われるようになったため、企画・運営による祭縁が保存会や囃子方を通して結ばれていると言っていいだろう。しかし、樋口（2012）は以下のように述べている。

祭礼実施のための仕組みも、祭を支えてきた人も、そしてそこにあるコミュニティも変化せざるを得なかったのはいうまでもない。にもかかわらず、毎年夏になれば、祇園祭の山鉾はいつもと変わらぬ堂々たる威容で見物人の目を楽しませ、神事に華を添える。その背後には、祭を支える人々によって繰り返される日々の営みがあり、そこに蓄積された、あるいはそこで新たに構築される社会関係が網の目のように張り巡らされて、「毎年変わらない」祭を実現させてきたのである。（樋口 2012:115）

上の言葉から分かるように、山鉾祭礼が存続されてきた背景には、様々な社会関係が存在しているという。鷹山は現在、巡行には参加しておらず、居祭を約190年もの間続けてきた。その居祭の存続の背後にも様々な社会関係が構築され続けてきたと考えて良いだろう。そ

して、巡行参加を目指し始めて動き始めた今、前節でみたように保存会や囃子方が作られ、お囃子のお披露目や祭礼品授与が始まり、上の言葉にあるような「日々の営み」や「新たに構築される社会関係」が生じ、町内のソーシャル・キャピタルに影響を与えたのではないかと考えた。

(2) アクターネットワークと実践コミュニティ

小松秀雄(2008)では、祇園祭の山鉾町の祭のしくみと地域社会のあり方をアクターネットワークと実践コミュニティという枠組みで探っている。アクターネットワークと山鉾町について小松(2008)はこう述べている。

人間以外の自然の物は人間と同等の行為能力(エージェンシー)をもつアクターネットワーク(行為者)であり、人間と非人間が結び付いてつくりあげる異種混合のネットワーク(ハイブリッド集合体)が社会と文化を動かす重要な要因であるとする。山鉾町を参考例に説明すると、町の住人だけでなく、山鉾、必要な道具、建物、道路、お金、情報などが欠かせないモノとして組み込まれているハイブリッド集合体である。この集合体は山鉾を支える外部の人びとやモノともつながりをもつ開放的なアクターネットワークでもある。

異なる種類のさまざまな要素が結びついたり、つながっているネットワークの姿については誰しも納得できるのにくらべ、人間以外のモノが行為能力をもつアクターであることには違和感があるかもしれない。これも事例で説明すると、建物や山鉾や道具は祇園祭のために人間が創造したものである反面、それらの形態・用途・使用法は担い手となる人間の生活や行動を規定する。つまり、人間はモノと相互作用する過程でモノの形態・用途・使用法適合する形で生活したり行動したりするので、モノの形態・用途・使用法から人間への影響力がモノの行為能力になる。

アクターとネットワークを結びつけて社会文化現象を考えていくアクターネットワーク(ハイブリッド集合体)の立場では、異種混合のハイブリッド集合体というアクターネットワークによって人びとは生活や行動の仕方を規定されつつ、他方では、そのネットワークを再生産したり変化させたりする。(小松 2008:64)

この言葉から分かるように、山鉾町は町の住人だけでなく、山鉾巡行に必要な物など様々なものが組み込まれているハイブリッド集合体であり、またそれは外部のさまざまな人や団体とつながりを持つという。そして、居祭のみをしていた際も、住民だけでなく様々な物が含まれたハイブリッド集合体であると言っていいだろう。しかし、鷹山の復興の動きが起こってそのハイブリッド集合体の内容は少なからず変化したはずである。また、鷹山復興を中心で進めている公益財団法人「鷹山保存会」は居祭を担当している衣棚町鷹山保存会とは別の組織であるため、町内に新たなハイブリッド集合体が生まれたと言ってもいいかもしれない。

また、小松(2008)は、「ハイブリッドなアクターネットワークを実際に構築したり組みかえたりするのは、人々であり、とりわけ実践コミュニティ(community of practice)と呼ばれる形に組織されている人である。」(小松 2008:69)という。ここで言う、実践コミュニティの定義を見ていくと、それは「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、

その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人の集団」(Wenger et al. 2002=2002:32)とされている。山鉾の巡行に関わる実践コミュニティは、町内会や自治会、保存会、囃子方からボランティアの人達まで様々なものが挙げられる。そして鷹山の町内では、鷹山の復興を目指す公益財団法人「鷹山保存会」が結成され、現在、復興を目指し動いており、その動きの中で2014年からお囃子の練習を始め、囃子方が復興した。つまり、この動きによって、鷹山町内に新しい実践コミュニティが生まれたと考えていいだろう。

さらに、小松(2008)は「巡行のためのアクターネットワークと実践コミュニティを構築することによって、国内外からの多数の観光客を感動させる華麗なパレードが可能となる」(小松 2008:70)と述べており、鷹山の町内はまさにその巡行に必要なアクターネットワークと実践コミュニティを構築している段階ではないだろうか。このように鷹山の復興が始まったことによって、アクターネットワークと実践コミュニティは変化、または新しく構築されたと考える。鷹山の復興による町内の変化は、町内の人達の関係性に影響を与えたはずだと考えた。

2.3 ソーシャル・キャピタルという概念

(1) ソーシャル・キャピタルとは

本稿では鷹山の復興が町内に与えた影響をソーシャル・キャピタルという概念を使用して調査していく。まず、ソーシャル・キャピタルとはどのような概念なのかをここで見ていこう。ソーシャル・キャピタルは社会関係資本や社会資本と訳され、パットナムによるとソーシャル・キャピタルとは「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」(Putnam 2000=2006:14)、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」(Putnam 1993=2001:2007)である。

初めに、ここで言われている互酬性について見ていく。パットナムは互酬性について次のように述べている。

互酬性には二種類考えられる。それらは、時々「均衡のとれた」(あるいは「特定の」)互酬性、「一般化された」(あるいは「一般的」)互酬性と呼ばれる。均衡のとれた互酬性は、同じ価値品目の同時交換、例えばオフィスの同僚がクリスマス休暇中にプレゼントを交換し合ったり、国会議員が議案通過で相互取引する行為などを指す。一般化された互酬性は、ある時点では一方的あるいは均衡を欠くとしても、今与えられた便益は将来には返礼される必要があるという、相互期待を伴う交換の持続的関係を指す。

(Putnam 1993=2001:213)

社会関係資本の試金石は、一般的互酬性である一直接何かが返ってくることは期待しないし、あるいはあなたが誰であるかすら知らなくとも、いずれはあなたか誰か他の人がお返ししてくれることを信じて、今これをあなたのためにしてあげる、というものである。(Putnam 2000=2006:156)

そして、パットナムは「一般化された互酬性は、社会資本のきわめて生産的な構成要素」(Putnam 1993=2001:214)と述べている。ここで、一般的互酬性はソーシャル・キャピタ

ルを構成する重要な要素であることが分かった。

次に信頼について見ていくが、信頼についても以下のように 2 種類あるとパットナムは言及している。

個人的な経験に基づく誠実性と、一般的なコミュニティ規範に基づく誠実性との間—角の店のマックスを長年知っているからという理由で信頼することと、先週コーヒーショップで初めて会釈した誰かを信頼することとの間—には、重要な違いがある。強力、頻繁で、広範なネットワークの中の個人的関係に埋め込まれた信頼は「厚い信頼」と呼ばれることがある。他方で、コーヒーショップでの新しい知り合いのような「一般的な他者」に対する薄い信頼もまた、共有された社会的ネットワークと互酬性への期待を背景として暗黙のうちに存在している。(Putnam 2000=2006:159)

さらに、「誠実性と信頼は、社会生活において避けがたい摩擦に対する潤滑油となる」(Putnam 2000=2006:158) という。

そして、ソーシャル・キャピタルの形式も 2 種類存在しており、以下のように述べている。

社会関係資本の形式の多様性のあらゆる次元の中で、最も重要なものはおそらく、「橋渡し型」(あるいは包含型)と、「結束型」(あるいは排他型)の区別であろう。社会関係資本の形態の中には、メンバーの選択やあるいは必要性によって、内向きの指向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していくものがある。結束強化型の社会関係資本の例としては、民族ごとの友愛組織や、教会を基盤にした女性読書会、洒落たカントリークラブなどがある。一方で外向きで、さまざまな社会的亀裂をまたいで人々を包含するネットワークもあり、その中には公民権運動、青年組織、^{エキキュメンニカル}世界教会主義の宗教組織などがある。

結束型の社会関係資本は、特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。(中略)

橋渡し型のネットワークは対照的に、外部資源との連繋や、情報伝播において優れている。(中略) ザヴィア・ド・ソーザ・ブリグスの表現によれば、結束型社会関係資本は、「^{ガッツテイング・バイ}なんとかやり過ごす」のに適し、橋渡し型社会関係資本は、「^{ガッツテイング・アヘッド}積極的に前へ進む」のに重要である。

加えて、橋渡し型の社会関係資本は、より広いアイデンティティや、互酬性を生み出すことができ、結束型社会関係資本によって強化される自己が、より狭い方向に向かうのとは対照的である。(Putnam 2000=2006:19)

以上のような、特徴や効果を持つソーシャル・キャピタルという概念を使用して、鷹山の復興が町内の人達に与えた影響を調査していく。本調査では、互酬性、信頼、ネットワークの 3 つをソーシャル・キャピタルの要素として考え、それぞれに 4 項目、または 6 項目の質問を作成し、インタビュー調査を行った。

(2) ソーシャル・キャピタル形成促進要因とは

ソーシャル・キャピタル量の増加を促進する要因を整扱っている研究をここで見ていこう。立木茂雄(2007)では、ソーシャル・キャピタルの形成を促進させる8つの軸が考えられた。それは、①地域・テーマへの興味・愛着を深める、②あいさつ、③イベント、④子供との関わり、⑤多様な住民参加、⑥共通の課題、⑦行政の支援、⑧組織の自立力の8軸である。(立木 2007) 立木(2008)では、その8軸を想定して全31項目の質問を作成し、その回答を分析したところ5つの因子が認められた。その5つの因子とは、①多様な住民参加、②イベント活用、③組織の持続力確保、④興味・愛着喚起、⑤あいさつである。そして、その調査の結果から以下のことが分かった。

5つのソーシャルキャピタル形成促進要因(多様な住民参加、イベント活用、組織の自立力の確保、興味愛着の喚起、あいさつ)は、それぞれに地域のソーシャルキャピタル量を高める効果が確認された。…すなわち、地域のソーシャルキャピタルを増やすには、1. 多様な住民や事業者、団体とのゆるやかな連携のネットワークを張り巡らせること、2. 多種多様で、多くの住民が参加できるイベントを活用すること、3. 組織としての自律性や継続性を維持する工夫をすること、4. 地域やテーマの魅力や「売り(セールスポイント)」を発信し、住民が地域を知り愛着を高められるような働きかけをすること、5. 近所同士であいさつを意識的に励行すること、といった5つの要素は、それぞれに地域住民間の交流や互恵的な規範、信頼を高める力を有していたのである。(立木 2008:69)

そして、立木(2008)で使われたソーシャル・キャピタル形成促進要因に関する質問項目を、立木(2011)で整理している。鷹山の復興が始まったことによって、立木(2011)で整理されていた質問項目に当てはまっているようなソーシャル・キャピタル形成促進要因が生じたかどうかを、本稿で調査していきたい。

2.4 リサーチクエスチョン

本調査の目的は鷹山の復興が町内の人達の関係性にどのような影響を与えたか調査することである。その町内の人達の関係性を、本調査ではソーシャル・キャピタルの概念を使用して、変化があったかどうかを見ていく。鷹山の復興が始まったことによって、ソーシャル・キャピタル促進要因が生じて、それに従ってソーシャル・キャピタル量も増加したといリサーチクエスチョンを掲げて調査する。

そして、本調査の意義についてだか、第二節でみたように、祇園祭の山鉾巡行を通して結ばれる関係性や、それを支える集団の特徴についての研究はあったが、祇園祭の山鉾巡行を担っているということが町内の人達の関係性にどう影響を与えているのかを研究しているものは、発見できなかった。本調査は、その影響を調査するものであるという意義を有している。

第3章 研究方法

本調査では、鷹山の復興によってソーシャル・キャピタル促進要因が生じたのかとソーシャル・キャピタル量が増加したのかを知るために、半構造化インタビュー調査を行った。鷹

山の町内と関わりのある 5 人にインタビュー調査の協力をしてもらった。以下の表は、インタビューを行った 5 人のプロフィールである。

表 2 調査対象者一覧

氏名	町内に住んでるか	勤め先が町内か	鷹山復興との関わり
A氏	○	×	保存会役員
B氏	×	○	保存会役員・囃子方
C氏	×	○	保存会役員・囃子方
D氏	×	○	なし
E氏	×	×	なし

町内に住んでいるか、勤め先が町内か、鷹山の復興との関わりを表にしている。鷹山の復興との関わりについて、復興を中心に担っている公益財団法人「鷹山保存会」と、2014年に復興した囃子方に所属しているかどうかを表記している。

鷹山の復興によってソーシャル・キャピタル促進要因が生じたかどうかを確認するインタビューを第一回インタビュー、ソーシャル・キャピタル量が増加したのかを確認するインタビューを第二回インタビューと呼ぶ。インタビューで不明だったところは追加インタビューか文書で確認した。インタビューは 5 人にそれぞれ 2 回、または 3 回行った。以下の表は、第一回インタビューと、第二回インタビューを行った時期をまとめた表である。

表 3 インタビュー時期一覧

氏名	第一回インタビュー時期	第二回インタビュー時期
A氏	2016.09.29	2017.1.4 2017.1.20
B氏	2016.10.17	2017.1.10
C氏	2016.10.19	2017.1.12
D氏	2016.10.27	2017.1.13
E氏	2016.11.2	2017.1.10

第一回インタビューでは、鷹山の復興の現状やこれまでどのような復興の動きがあったのか、その方との鷹山の復興との関わりあい、などを中心に質問項目を構成し、半構造化インタビューを行った。その中の話の中から、ソーシャル・キャピタル促進要因が生じたかどうかを第 4 章で確認していきたい。以下の表は、5 人それぞれに質問した内容をまとめた表である。

表4 質問項目一覧（第一回目インタビュー）

氏名	質問内容
A氏	<ul style="list-style-type: none"> ・お囃子が始まったことによるお町内の方の動き、認識の変化 ・お囃子の練習場所について
B氏	<ul style="list-style-type: none"> ・2016年の祇園祭の鷹山の様子・近年の鷹山復興への支援の広がりについて(人的・復興のキーパーソン・物的・資金・会所など) ・お囃子の活動の広がり ・活動場所と状況 ・勤め先での認識の変化 ・お町内の人や囃子方、近隣の方々(特に三条通界限の方々)の変化
C氏	<p>お囃子復興の苦労話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メンバーの募集・鷹山の譜面の復興 ・メンバーの増加とお囃子の練習場所の確保・変遷 ・現在のメンバー構成(人数・年齢構成・他の山での経験) ・お町内の人や囃子方、近隣の方々(特に三条界限の方々)の変化 ・2026年復興までの障壁
D氏	<ul style="list-style-type: none"> ・鷹山が町内にあると気が付いたのはいつか ・祇園祭・鷹山との関わり方 ・鷹山の復興についての考えや思い ・勤め先での変化 ・お町内の変化
E氏	<ul style="list-style-type: none"> ・祇園祭・鷹山との関わり方 ・鷹山の復興についての考えや思い ・勤め先での変化 ・お町内の変化

第二回インタビューでは、ソーシャル・キャピタル量の増加を測定するための質問項目を作成し、半構造化インタビューを行った。本調査では、ソーシャル・キャピタルを互酬性、信頼、ネットワークの3要素から構成されているものとして、それぞれの要素に4、または6項目の質問を作成した。以下の表が、ソーシャル・キャピタル量についての質問一覧である。

表 5 質問項目一覧（第二回目インタビュー）

互酬性	(1) 見返りが不確かでも町内の人のために何かをしようと思うか
	(2) すぐに見返りがもらえなくても町内の人のために何かしようと思うか
	(3) 町内の誰であるか詳しく知らなくても何かしようと思うか
	(4) あなたが町内の人のために何かをしたら、町内の人はあなたのために将来何かしてくれると思うか
信頼	(1) 町内の人達はお互いに信頼しあっていると感じるか
	(2) 町内の大半の人達は信頼できると感じるか
	(3) 町内の人と付き合うのは注意するにこしたことはないと思うか
	(4) 町内でその人のことを詳しく知らなくても、信頼しているか
	(5) 町内で信頼に値するようふるまいをする人が増えたか
	(6) 町内の人から、信頼に値するとされるようふるまいが増えたか
ネットワーク	(1) 町内の企業や個人とつながりが出来たか
	(2) 町外のような企業や団体、個人とのつながりが出来たか
	(3) 鷹山保存会や町内会で自分の意見を言いやすくなったか
	(4) 町内で一緒に夕食をとるような友人が増えたか
	(5-1) 町内のイベントに参加する人が増えたか
	(5-2) 町内のイベントに参加しようと思うようになったか
	(6-1) 鷹山の復興に協力してくれる人は増えたか
	(6-2) 鷹山の復興を協力しようと思うようになったか

第二回インタビューは、5人それぞれに同様の質問を行い、鷹山の復興が始まったことによって、それぞれの項目の感情に変化があったのか、それぞれの項目のような変化があったのかを調査した。ネットワークの質問項目の(5)(6)についてだが、この質問についてだけ、インタビューする人によって質問を変更させている。すでに町内のイベントに参加している人には(5-1)の質問を、町内のイベントに参加していない人には(5-2)を聞いた。同じように、すでに鷹山の復興に協力している人は(6-2)の質問を行い、そうでない人には(6-2)を行った。

以上の様に、集めたデータをどのように第4章で分析、考察していくのかを述べていきたい。第一回インタビューで採集したデータから、立木(2011)で整理された質問項目一覧を使用し、データの中からその項目に当てはまるものが鷹山の復興によって生じたかどうかを見ていく。以下の表が、その質問項目である。

表 6 2008 年度自治会・管理組合基本 調査での使用項目

質問項目	概念
Q29(17)いろいろな住民や商店街・地元の企業の人たちが地域の活動に参加できるように、間に入って仲介してくれる人を見つけること	
Q29(21)商店街、地元の企業などと連携すること	
Q29(16)地域の課題を解決する際に、自治会・管理組合だけでなく商店街や地域の企業などにも幅広く参加をよびかけること	ソーシャルキャピタル促進要因 (多様な住民参加)
Q29(22)共通の課題を解決するためにNPOなどと連携すること	
Q29(14)子ども自身の手で行事・イベントづくりができるようにすること	
Q29(12)子どもと大人と一緒に参加できるような行事・イベントを企画・開催すること	
Q29(9)住民が主体となって行事・イベントを企画・開催すること	
Q29(13)多様な年代の子ども(幼児・児童生徒)が集まれるたまり場をつくること	ソーシャルキャピタル促進要因 (イベントの活用)
Q29(10)地域の行事・イベントに、住民が参加するよう促すこと	
Q29(11)ごみ問題や住環境の問題などを解決するために活動を地域内でイベント化(のぼりを立てて地域内を練り歩くなど)し、みんなが楽しんで参加しやすくすること	
Q29(18)地域がかかえる共通の問題を住民に広く知ってもらうこと	
Q29(19)地域の課題を解決するときに頼りにできる人や手助けをしてくれる人を見つけること	
Q29(15)地域の課題を解決する際に、自治会・管理組合だけでなく関心を持っている個人にも広く参加をよびかけ	ソーシャルキャピタル促進要因 (組織の自律力確保)
Q29(20)役員の決め方や運営が引き継がれるように、マニュアルやハンドブックを作ること	
Q29(23)行政の下請けではなく行政と対等な関係を保って地域活動を行うこと	
Q29(3)地域の魅力やウリ(自慢できるヒト・モノ・コト)を見つけ出すこと	
Q29(1)地域の伝統・文化・歴史を知ること	ソーシャルキャピタル促進要因 (興味・愛着喚起)
Q29(4)地域の魅力やウリを広報紙やホームページなどを使って地域の内外に発信すること	
Q29(5)特定のテーマで活動を行っているボランティアやNPOなどを知ること	
Q29(2)地域の生活で役立つ情報を集めること	
Q29(6)近所同士であいさつをすること	
Q29(7)近所同士で努めてあいさつをするよう、近所の皆さんに促すこと	ソーシャルキャピタル促進要因 (あいさつ)
Q29(8)商店街やPTAなども巻き込んで子どもたちが地域の大人たちとあいさつをするような工夫をこらすこと	
Q30(1)近所の人同士があいさつを行うこと	
Q30(2)住民同士が立ち話を行うこと	
Q30(3)住民同士が趣味やスポーツを一緒に行うこと	
Q30(4)住民同士が一緒に出かけたり、買い物や食事をしたりすること	
Q30(5)おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもらったりすること	ソーシャルキャピタル量推定値
Q30(6)お互いの家に遊びに行ったり、来てもらったりすること	
Q30(7)お互いにお節介をやいたり、思いやったりすること	
Q30(8)ちょっとしたことで、助け合いをすること	
Q30(9)お互いに友達になること	

(立木茂雄, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域の安全・安心に関する実証的研究」『地域安全学会論文集』, 2003年, 29ページ 表1)

また、第二回インタビューでは、ソーシャル・キャピタル量が鷹山の復興によって増加したのかをまとめ、その結果について第4章で見たい。

第4章 調査結果

第4章では、採集したデータを分析した結果を述べ、そこから考察していく。まず第一節ではソーシャル・キャピタル促進要因が第一回目インタビューで確認できたかどうかと、ソーシャル・キャピタル量の増加が確認できたのかを見ていき、それらの考察を行っていく。そして第二節では、町内のソーシャル・キャピタル量と鷹山の復興の動きに「ポジティブ・フィードバック」な関係性が結ばれている可能性についてみていく。

4.1 結果と考察

(1) ソーシャル・キャピタル形成促進要因について

まず、第一回インタビューでソーシャル・キャピタル促進要因が確認できたかどうかを見ていこう。以下の表は、第一回インタビューで確認できたソーシャル・キャピタル促進要因をまとめている。

表7 確認できたソーシャル・キャピタル促進要因一覧

【あいさつ】	近所の人同士であいさつを行うこと	C氏	喋る機会が増え、元から住んでいる人と挨拶をするようになった。 囃子方の人達は町内の人に気さくに挨拶をしている。
【興味・愛着喚起】	地域の魅力やウリを見つけ出すこと	A氏	町内の人と話す中で、お囃子を家で聞いていたと知る。
		C氏	二階囃子を外で聞いていると、町内の人も集まって来ているのが感じられ、「ええなあ。」と言われることもある。 復興するかどうかを決める段階では、大変だと言う話をされていたが、復興が始まって動くうちに、「頑張りや。」という言葉に変化した。
		D氏	町の活性化になるのなら、復興している方が面白いと思う。
	E氏	祇園祭の際にお囃子が聞こえるようになり、「祇園祭なんやな」と感じられるようになった。	
	地域の魅力やウリを広報紙やホームページなどを使って地域の内外に発信すること	B氏	お得意先に粽を配布した。 鷹山の展示をしてもらえるかもしれない。
【多様な住民参加】	地域の活動には、老若男女を問わず、様々な住人が参加している	B氏	祭礼品授与の売り子として、囃子方の子供やその友達、囃子方の知り合いの大学生やオーエルの方、町内の子供が参加。
	地域の活動には、住民だけでなく、地元の商店街や企業も参加している	C氏	囃子方には小学生から60代まで所属している。
		B氏	町内のテナントが粽を買いに来てくれた。 囃子方や鷹山の復興に協力してくれている人達の中に、町内のテナントや飲食店の方たちが参加している。

第一回目インタビューから、「あいさつ」、「興味・愛着喚起」、「多様な住民参加」の3つの軸のソーシャル・キャピタル促進要因が確認できた。その3軸について詳しく見ていく。

「あいさつ」軸についてだが、C氏は、自分が町内の人とあいさつをするようになったと述べており、これは鷹山の復興がきっかけで話す機会が増えたためだという。このことは鷹山の復興によってソーシャル・キャピタル促進要因が生じたと言える。また、「囃子方の人達は気さくに町内の人達とあいさつをしている」状況は、ソーシャル・キャピタル促進要因が存在している状況ではあるが、それが鷹山の復興をきっかけかどうか断言することは出来ない。ここでは、鷹山の復興がきっかけで話す機会が増え、あいさつをするようになったというソーシャル・キャピタル促進要因が確認できた。

次に、「興味・愛着喚起」軸についてであるが、「興味・愛着喚起」軸では5人全員から、ソーシャル・キャピタル促進要因が確認できた。その軸の中の「地域の魅力やウリを見つけ出すこと」についてだが、ここでは鷹山の復興を上表で出てくる「地域の魅力」に含み、

鷹山の復興を魅力と感じているような町内の人達や自身の様子を、「地域の魅力やウリを見つけ出すこと」とした。A氏とC氏からは、町内の人達がお囃子を聞いていたり、応援する声かけに変化したりと、鷹山の復興を魅力と捉えた町内の人達の行動が確認できた。D氏とE氏からは、自身が鷹山の復興自体や、それによって聞こえてくるようになったお囃子の音を魅力と感じていることが確認できた。また、「地域の魅力やウリを広報紙やホームページなどを使って地域の内外に発信すること」だが、これも前と同様に、鷹山の復興を「地域の魅力」に含み、それを地域の内外に発信しているかどうかを見ていった。B氏は、勤め先のお得意先に粽を配っており、それは「地域の魅力」を地域の内外に発信する行為と言っていいだろう。またB氏は鷹山についての展示をしてもらう機会があるかもれないとも話しており、不確定な話ではあるが、もしそれが現実となったら鷹山の復興を地域の内外に発信することであるとした。つまりここでは、鷹山の復興という「地域の魅力」が出来て、それを見つけ出したり地域の内外に発信したりするというソーシャル・キャピタル促進要因が生じたことが分かった。

次に「多様な住民参加」軸について見ていく。鷹山の復興によって始まったお囃子や祭礼品授与を「地域の活動」に含めて、ソーシャル・キャピタル促進要因が生じたか確認した。B氏とC氏からは、鷹山の復興によって始まった祭礼品授与の売り子とお囃子のメンバーに様々な年代の住民が参加していることが確認できたため、それを「地域の活動には、老若男女を問わず、様々な住人が参加している」とした。さらにB氏から、鷹山の復興に町内の飲食店やテナントの方が参加していることが分かり、そのことを「地域の活動には、住民だけでなく、地元の商店街や企業も参加している」とした。ここでは、鷹山の復興という新たな「地域の活動」が生まれたことによって、それに様々な住民が参加し、町内にソーシャル・キャピタル促進要因が生じたことが確認できた。

ここまでは、町内のソーシャル・キャピタルを促進するような要因を見てきたが、本調査で、鷹山の復興の動きがソーシャル・キャピタル促進要因にならないことも確認できた。以下の表がその点をまとめた表である。

表8 ソーシャル・キャピタル促進要因にならない項目一覧

【イベントの活用】	地域行事・イベントに、住民が参加するよう促すこと	B氏	鷹山の復興への協力は、町内の人から自然に自主的に来てくれるのを待っている形。勤め先でも、自主的に手伝ってくれる人を待っている。
-----------	--------------------------	----	---

「イベント活用」軸の「地域行事・イベントに、住民が参加するよう促すこと」をしないということが、B氏のインタビューから分かった。ここでは、鷹山の復興の動きを「地域の行事」として捉えた。B氏は鷹山の復興への協力をお願いするのではなく、町内の人たちや勤め先の人達自らしたいと言ってくれるのを待っているという。鷹山の復興の動きが、必ずしもソーシャル・キャピタルを促進する要因になるとは限らないことが分かった。

この節では第一回目インタビューから鷹山の復興によってソーシャル・キャピタル促進要因が生じたかどうかを見てきた。鷹山の復興によって生じた「あいさつ」、「興味・愛着喚起」「多様な住民参加」の3つの軸のソーシャル・キャピタル促進要因を確認できた。しか

し、鷹山の復興がソーシャル・キャピタル促進要因に繋がらないことも分かった。

さらに考察をしていきたい。「興味・愛着喚起」軸についてだが、ここでは前提として「地域の魅力」に鷹山の復興を含めていた。しかし、そう考えてない町内の人達にとっては、このソーシャル・キャピタル促進要因は生じなかったと考察できる。また、「多様な住民参加」軸のソーシャル・キャピタル促進要因について、鷹山の復興の動きの中で始まった祭礼品授与の売り子や囃子方で様々な住民が参加していることが確認できた。しかし、祇園祭の祭礼品授与の売り子は女性が行い、囃子方は男性が行っている。他の男女ともに参加できる「地域の活動」と比較すると、この祭礼品授与や囃子方は「多様な住民参加」とは言うことが出来ない。しかし、ここでは、新たに鷹山の復興が始まったことによって生じた「地域の活動」は、男女の縛りはあるものの、世代を超えた様々な住民が参加しているものとして、ソーシャル・キャピタル促進要因とした。

(2) ソーシャル・キャピタル量について

次にこの節では第二回目インタビューで、町内のソーシャル・キャピタルの増加が確認できたかを見ていく。第二回インタビューでは、互酬性、信頼、ネットワークの3つの要素それぞれに4つか6つの質問項目を設定し行った。3つの要素それぞれについて、鷹山の復興をきっかけに、どうなったかを見ていきたい。

① 互酬性

互酬性についてまとめたものが、以下の表である。

表9 回答一覧（互酬性）

		互酬性				
		A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
(1)	・強くなった ・見返りは求めてない	・変化なし	・変化なし	・鷹山の復興が始まったくらいから町内の子供のために何かしようと思うようになった	・変化なし	・変化なし
(2)	・強くなった ・鷹山の復興が町内の人のためになってるか分からない	・変化なし	・変化なし	・変化なし ・見返りは考えていない	・変化なし	・変化なし
(3)	・強くなった ・町内の誰であるかを知る機会が増えた	・変化なし	・変化なし	・変化なし ・町内の誰であるかを詳しく知る機会が増えた	・変化なし	・変化なし
(4)	・強くなった ・困った時に助けてくれるだろう	・変化なし	・変化なし	・変化なし	・変化なし	・変化なし

互酬性についての(1)から(4)までの質問項目の感情が鷹山の復興をきっかけにより強く思うようになった等の変化があったのか、または変化はなかったのかをまとめている。A氏は、鷹山の復興をきっかけに強くなったと答えており、その理由として「これまでは、自分の家族のための町内やった訳やけども、自分の家族のための町内でもあり、鷹山のための町内でもあるわけやから」と述べている。鷹山の復興が起こったことによって、A氏の互酬性は高まった。しかし、互酬性について、変化なしとの回答がほとんどであった。C氏は4項目中3項目で変化なしとしていた。(1)について、鷹山の復興が始まった時期くらいから、町内の子供たちのために何かしたいという思いが出てきたというのが、鷹山の復興がきっかけ

けは不明である。また(3)の項目は鷹山の復興をきっかけにした変化は見られないが、鷹山の復興をきっかけに町内の人が誰であるかを詳しく知る機会が増えたという。そして、B氏、D氏、E氏については、どの項目についても変化なしと回答していた。そのことについて、B氏は「このこと(鷹山の復興)を契機に町民に対する思いとかが変わったかと言われると別に変わってない」、「人を思う心情ってそう変わらへんから」と述べていた。D氏に(3)の質問をしたところ、町内で「何か困ったはる人がいるんやったら助けようとは思うね」と述べていたが、その気持ちが鷹山の復興によって強まったわけではないという。ここでは鷹山の復興によって、ソーシャル・キャピタルの3要素の一つである互酬性が高まったかどうかを見てきた。以下の表は、互酬性についての質問4つを「変化あり」と「変化なし」に分類した数を表わした表である。

表10 当てはまる項目数(互酬性)

	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	合計
変化あり	4	0	1	0	0	5
変化なし	0	4	3	4	4	15

合計数を見ると4分の3が「変化なし」との回答になったため、鷹山の復興は町内の人達の互酬性を高めたとは言い難い結果となった。人物によって差が出ており、唯一の町内の住民であるA氏がすべての項目において、強くなったと答えていた。町内に住んでいるかどうかによって互酬性の高まりに差が出たと考察することが出来る。町内に住んでいない人にも互酬性について差が見られ、その差はどこから来るのかは不明である。

② 信頼

次に、信頼について見ていく。以下の表は、信頼についての質問項目6つに対する5名の回答をまとめたものである。

表11 回答一覧(信頼)

	信頼				
	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
(1)	・復興しようとしている集団の中では高まっている	・鷹山の復興を目指している人の中で感じる	・喋る機会が増えて、感じるようになった	・変化なし	・復興したいと考えている人達の中で感じる
(2)	・変化なし ・昔から信頼していたし、これからはもうこうと思う	・鷹山の復興によって共に行動する時間が増えて、その中で相手のことが分かり、信頼できると感じられることがある	・付き合う人ができ、信頼できる人が増えた	・変化なし	・変化なし
(3)	・変化なし ・今も昔も注意することはない ・鷹山の復興について、どう考えている人なのかという注意の仕方をするようになった	・変化なし	・注意しないでよかった	・変化なし	・変化なし
(4)	・変化なし ・昔から信頼する方	・変化なし	・変化なし ・詳しく知らなかったら信頼は出来ないが、詳しく知ろうとするようになった	・変化なし	・変化なし
(5)	・あいさつをする人が増えた	・復興が始まるまでは、信頼に値するようなふるまいをするかどうか不明だった ・鷹山の復興の動きの中で、信頼に値するようなふるまいをする人だと感じることができる	・増えたと感じる	・変化なし	・信頼に値するようなふるまいをしているかどうか分からない
(6)	・会ったら挨拶だけでなく会話をするようになった ・常に見られる意識をするようになった	・鷹山の復興について、きっちりするようにする	・変化なし	・変化なし	・変化なし

信頼についての質問項目の(3) 町内の人と付き合うのは注意するにこしたことはないと思うかは、他の質問と異なり、注意するにこしたことはないと思うことが少なくなったり、注意しないでよくなったりしたという変化の仕方が確認できたとき、信頼が高まったとする。他の質問項目は、質問項目に書いてある思いを強く思うようになったり、行動の回数が増えたりしたという変化があったとき、信頼が高まったとする。

信頼が鷹山の復興をきっかけに高まったのかどうかを質問項目ごとに見ていきたい。まず(1)についてだが、5名中4名が町内の人達がお互いに信頼しあっていると感じるようになったと回答した。その中でもA氏、B氏、E氏は、復興を目指している人達はお互いに信頼しあっていると感じたと述べている。C氏は、鷹山の復興によって喋る機会が増えて、「この人の任しといたら大丈夫とかいう意識もあるし、その人もC氏に任しといたらいいわっていう考え」を感じることもあるという。つまり、鷹山の復興が始まり、それを目指す人達の中で信頼を感じるようになったことが分かった。しかし、現段階では、そうでない人に鷹山の復興は影響を与えるものではないという推察が出来る。

(2)に関して、B氏とC氏から、鷹山の復興をきっかけにした変化を確認することが出来た。B氏は鷹山の復興の動きの中で、役員や協力してもらっている人と共に行動する時間が増えたため、その中で信頼できると感じることもあるという。またC氏は、鷹山の復興によって「付き合う人が増えたんで、信頼できる人は増えたと思います」と述べていた。鷹山の復興によって、信頼できる人の数が増えたことがB氏とC氏の回答から分かった。

(3)については、C氏から変化を確認することができた。C氏は、復興が始まる前は、自身のことについて話す内容を注意していたが、鷹山の復興が始まってからはそういう注意をしないようになったという。またA氏は以前から変わらず町内の人達に対して注意せずにいるという。しかし、町内の人と話す際、その人が鷹山の復興についてどう考えているかという注意はするようになったと回答していた。鷹山の復興によって、町内の人に対して注意しないでよくなった面もあるということが分かった。

(4)については、5名全員から鷹山の復興をきっかけにした変化を感じる事が出来なかった。B氏は「町内でその人のことを詳しく知らなくても、信頼している」とは思わないが、鷹山の復興があることによって集まる機会や喋る機会が増えたという。そしてC氏も、詳しく知らなかったら信頼はできないが、詳しく知ろうと努力するようになったという。鷹山の復興はB氏とC氏の「町内でその人のことを詳しく知らなくても、信頼している」という信頼に影響は与えなかったが、町内の人のことを詳しく知る機会を増やし、知ろうとする気持ちを生じさせたことが分かった。

(5)についてだが、ここでいう「信頼に値するようなふるまい」とは、例えば時間をきっちり守ったり、約束事を守ったりというような、その人は信頼できると思えるようなふるまいのことである。A氏、B氏、C氏からは変化を確認できたが、D氏からは変化を確認できず、E氏からは変化があったかどうか分からないという結果になった。A氏は変化を感じており、あいさつをする人が増えたという。B氏は鷹山の復興が始まるまでは、そういう「信頼に値するふるまい」をする人がいるかどうか、付き合いがあいさつ程度だったことやそういう機会がなかったことから、不明だったという。しかし、鷹山の復興が始まり、それに参加している人の中で「信頼に値するふるまい」を感じることもあり、信頼に値する人だと感じるという。C氏も増えたと感じると回答していた。そして、E氏は町内と深く関わ

っていないため、町内の人が「信頼に値するふるまい」をしているかが不明だという。つまり(5)では、鷹山の復興をきっかけに「信頼に値するふるまい」をしている人が増えたと感じていたり、「信頼に値するふるまい」をする人がいると確認できるようになったりしたことが分かった。鷹山の復興は、それまでは「信頼に値するふるまい」をしているかどうかさえ不明だったB氏にそのようなふるまいをしていると認識させた。しかし、E氏は鷹山の復興が始まった現在でも、そのようなふるまいをしているかどうか分からないといい、B氏と同じような影響をE氏に対して与えなかったことも分かった。

また、自分がそのようなふるまいをするようになったかという質問(6)についてであるが、A氏とB氏から変化を確認できた。A氏は町内の人と会うとあいさつだけでなく会話もするようにして、また、常に見られているという意識を持ち行動するようになったという。B氏は「やらなあかんことはきっちりとしとかなあかん」と、鷹山の復興に関する情報を事前に伝えることなど、鷹山の復興に対してきちんとするように心がけているという。鷹山の復興によって、見られている意識が生まれ「信頼に値するふるまい」をするようになったり、町内に対してきちんと事前に情報を伝えるという「信頼に値するふるまい」を心がけるようになったりしたことが分かった。

ここでは、ソーシャル・キャピタルを構成する要素の一つの信頼について、鷹山の復興によって起こった変化を見てきた。以下の表は、鷹山の復興によって変化が見られたかどうかを、「変化あり」、「変化なし」、「分からない」の3つに分け、その当てはまる項目数を示したものである。

表 12 当てはまる項目数（信頼）

	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	合計
変化あり	3	4	4	0	1	12
変化なし	3	2	2	6	4	17
分からない	0	0	0	0	1	1

ここまで、鷹山の復興による変化について見てきたが、「変化あり」と「変化なし」の比較をすると変化なしの方が多い結果となった。しかし、その配分について個人によって差が出ており、A氏、B氏、C氏は「変化あり」と「変化なし」が同数か、または「変化あり」の方が多い結果となっている。しかしD氏とC氏は「変化なし」が「変化あり」を上回っている。A氏、B氏、C氏は鷹山の復興に公益財団法人「鷹山保存会」の役員や囃子方として関わっており、より変化を感じることができるとこのような差が生まれたと考察できる。それについて詳しく見ていく。(1)で鷹山の復興は、それを目指している人達の中でのお互いの信頼を高めていたが、そうでない人達には影響を与えなかったことが分かった。さらに(5)では、鷹山の復興は、B氏には「信頼に値するふるまい」を感じられるようになったという影響を与えたが、E氏は現段階でもそういうふるまいをしているか不明だといい、B氏と同じような影響は与えなかった。この2つの質問項目からも、鷹山の復興は、それを目指す人や積極的に協力している人に対して、より影響を与えたと考えることができ、鷹山の復興へのかかわり方が上の表のような差を生み出していると推察する。

③ ネットワーク

最後にネットワークについて、鷹山の復興による変化があったかどうかを見ていく。以下の表はそれをまとめたものである。質問項目ごとに詳しく見ていく。

表 13 回答一覧（ネットワーク）

	ネットワーク				
	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
(1)	・増えた ・町外で済ませてた夕食を町内ですますようになった	・増えた	・勤め先に来る人と話すようになった ・財団法人鷹山保存会に入っていない町内の人とのつながりも増えた	・出来ていない	・出来ていない ・復興に関する話の中で、あいさつする仲になった人はできた
(2)	・増えた ・祇園祭関係の年賀状が増えた	・増えた ・山鉾連合会、他の山鉾町の役員 ・鷹山の復興で今後関わり合いそうな企業 ・行政関係	・他の保存会や町内の方と話すことが多くなった	・出来ていない	・出来ていない
(3)	・変化なし	・変化なし	・言いやすくなったと感じる	・変化なし	・変化なし
(4)	・変化なし	・役員や囃子方との打ち上げや忘年会	・増えた ・囃子方がほとんどだが、それ以外の方とでも行くことが増えた	・変化なし	・変化なし
(5-1)	・夏祭りの参加人数に変化は見られない	・夏祭りの参加人数は増えたように思える	・夏祭りの参加人数は増えた実感はない ・夏祭りの雰囲気を楽しむ感じになった		
(5-2)				・変化なし	・変化なし
(6-1)	・増えた	・増えた ・粽作りの参加人数が少し増えた	・粽を売る売り子をしたという人が増えた		
(6-2)				・協力しようと思うようになった	・変化なし

(1) についてだが、A 氏、B 氏、C 氏は鷹山の復興によって、町内の企業や個人とつながりが出来たという。A 氏は企業とのつながりは出来てないが、夕食で外食をしようとなった時に「これまで結構、遠く行ってたけど、全部町内ですまそうという風になった」といい、町内の飲食店とのつながりが出来た。B 氏からもつながりが増えたことを確認できた。C 氏は勤め先に来る人と話すようになったという。また、公益財団法人「鷹山保存会」に所属していない人で協力してくれる人もおり、そこでのつながりもできたという。また、E 氏は鷹山の復興によって、町内の人とのつながりは出来ていないと回答していたが、鷹山の復興に関する話をして、関わりなかった町内の人とあいさつする関係になった人もいたという。鷹山の復興が町内の企業や人達とのつながりを作ったことが分かった。

(2) も同様に、A 氏、B 氏、C 氏から鷹山の復興によって、町外の企業や個人とのつながりが出来たことが確認できた。A 氏は、祇園祭関連の年賀状の数が増えたという。また、A 氏は祇園祭の知識を得るために様々な山鉾町を回って、そこで話して色々教えてもらうというつながりもできたという。B 氏は、祇園祭山鉾連合会や他の山鉾町の保存会の役員とのつながりができたという。さらに、行政関係や鷹山の復興において今後関わりが出来そうな企業とのつながりが出来たという。また C 氏は「他の保存会の方とか、隣の町内の方にもいろいろ話かけられたりすることは多くなりましたね。」という。つまり、鷹山の復興によって、町外の企業や個人とつながりができたことが分かった。

(3) について、C 氏のみが言いやすくなったという変化を感じていた。しかし、それは若い人が増えてきたこともあるといい、鷹山の復興の他に町内の構成の変化が、町内会などの場での意見の言いやすさに影響を与えることが分かった。

(4) では、B 氏と C 氏が増えたという回答していた。B 氏は、鷹山の復興の動きの中で、忘

年会や打ち上げで、C氏は囃子方や、それに入っていない人とでも夕食に行くようになったという。鷹山の復興が、夕食を一緒にとるような友人を増やすという影響を与えたことが分かった。

(5-1) と (5-2) について見ていきたい。町内のイベントについてだが、夏祭りが 2009 年から鷹山を擁する衣棚町で夏祭りが行われていると知り、その夏祭りについて参加人数が増えたか、または参加しようと思うようになったかを聞いた。B氏とC氏から変化を確認することが出来た。B氏は夏祭りの参加人数は増えたように感じるという。C氏は夏祭りの参加人数が増えた実感はないが、夏祭りの雰囲気が変わってきたと以下のように述べた。

増えたかいうと変わらへんのやけども、鷹山復興をきっかけに集まっても、そういう親近感っていうか、楽しい感じにはなりましたね。最初の頃はよそよそしい感じやったんですけど、1つのそういう話題も多いしね、話してても。老人の人らでもどうなってるのかいうて、そういう話で盛り上がりもするんで。

ここでは鷹山の復興が実際の夏祭りの参加人数が増えたかどうか論じることが、数的なデータが存在しないため不明である。しかし、鷹山の復興が夏祭りの雰囲気を楽しい雰囲気にさせるという影響を与えたことが分かった。また、B氏は増えたと実感しており、鷹山の復興が夏祭りの参加人数の増加に影響を与えた可能性があることが分かった。

最後に (6-1) と (6-2) についてである。A氏とB氏、C氏、D氏から変化を確認できた。A氏は増えた実感があるといい、復興が動き始めた頃は復興に積極的ではなかった人が、復興が進むにつれて復興に対して「ええな」という風な考えに変化した例を確認できた。B氏は企業も含めて協力してくれる人が増え、粽作りの参加人数も増えたという。C氏も鷹山の復興に協力してくれる人は増えたと感じていた。祭礼品授与で粽を売る売り子をしたという人が増えたり、何も手伝えることはなくても鷹山の復興を応援してくれる人が増えたりしたという。またD氏は復興に協力しようと思うようになったと述べた。ここでは、粽作りの参加人数も夏祭りの参加人数と同様、数的なデータがないため、実際の参加人数の増減は測定することが出来ない。しかし、鷹山の復興に協力してくれる人が、粽作りの参加人数という形で増えた可能性があることが分かった。また、鷹山の復興に対する考えが変化したり、実際にE氏から協力しようと思うとの回答があったように応援してくれる人が増えたりという変化も確認できた。

以下の表は、鷹山の復興によって変化が見られたかどうかを、「変化あり」と「変化なし」に分け、その当てはまる項目数を示したものである。

表 14 当てはまる項目数 (ネットワーク)

	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏	合計
変化あり	3	5	5	1	0	14
変化なし	3	1	1	5	6	16

ここでも、「変化あり」と「変化なし」の合計数では、「変化なし」が上回ったが、個人で見ると配分に差が見られる。A氏、B氏、C氏は「変化あり」と「変化なし」が同数か、「変

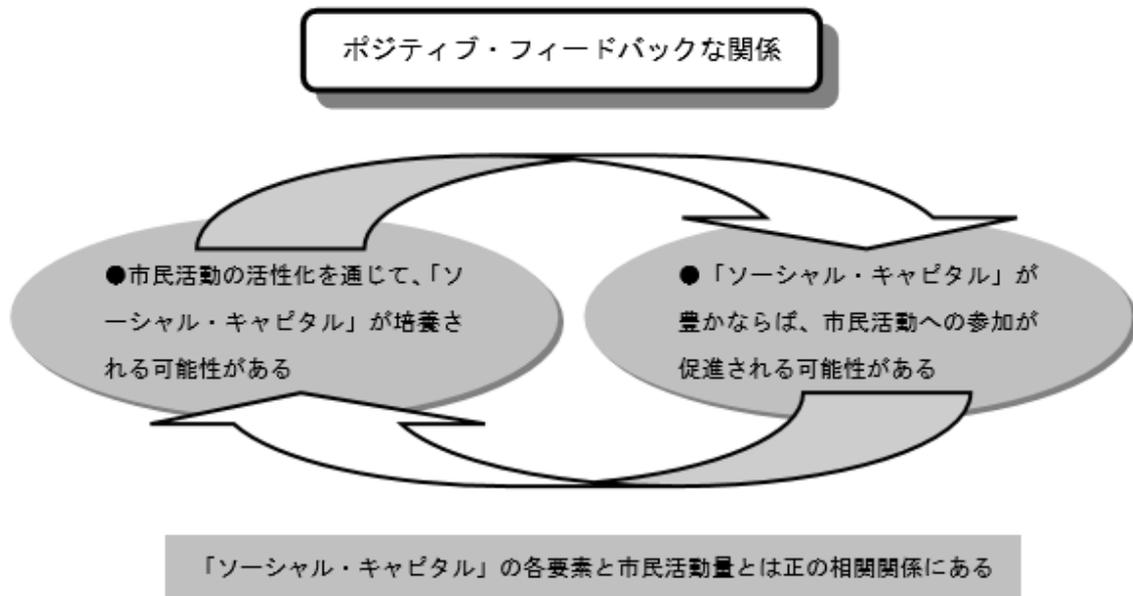
化あり」の方が多くなり、D氏とE氏は「変化なし」の方が多くなった。公益財団法人「鷹山保存会」に所属して鷹山の復興に関わっている方が変化をより感じているとみることが出来る。また、同じ公益財団法人「鷹山保存会」に所属していても、差は生じているが、それがどこから来るのかは不明である。

4.2 「ポジティブ・フィードバック」な関係性

前節では、ソーシャル・キャピタル促進要因とソーシャル・キャピタル量について見てきた。ソーシャル・キャピタルの増加について以下のようなことが、分かっている。

ソーシャル・キャピタルの培養とボランティア活動を始めとする市民活動の活性化には、互いに他を高めていくような関係、すなわち、「ポジティブ・フィードバック」な関係性があると考えられる。

図2 ソーシャル・キャピタルと市民活動の関係



(内閣府国民生活局, 『平成14年度 ソーシャル・キャピタル: 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』, 2003年, 56ページ 図表Ⅲ-24)

鷹山の復興の動きを市民活動と捉えて考える。そうすると、鷹山の復興がソーシャル・キャピタルを培養し、またソーシャル・キャピタルが豊かならば鷹山の復興への協力を促進する可能性があるということだ。今回の調査を通じて、ソーシャル・キャピタルが豊かであったため、鷹山の復興の動きが始まって協力が促進された可能性が確認できた。鷹山の復興より以前から始まった町内の夏祭りが町内のソーシャル・キャピタル量を増加させる働きかけをしている可能性があることを確認していきたい。

A氏は

急に鷹山復興しましょうという話で、鷹山の囃子方が結成されて、どんどん人が集まってきたというのではなくて、全段階として、夏祭りがあって、夏祭りでみんな顔見知りになって

と、述べている。さらにA氏は、夏祭りを重ねるごとに夏祭りの中で「信頼に値するふるまい」をする人が増えてきたという。C氏は、鷹山の復興が始まる以前、夏祭りで鷹山の話をして、興味を示す人がいたため、復興に向け動き出せると感じる事ができたという。また「衣棚町夏祭りっていうのをはじめてから町内の人と喋る機会が多くなったんですね。」と述べていた。この2名から、夏祭りが町内のソーシャル・キャピタル量を増加して、その結果鷹山の復興を始めることができたり、協力を促進したりした可能性があることが分かった。そうして、鷹山の復興を通じて再び町内のソーシャル・キャピタルは増加して、またその増加したソーシャル・キャピタルが町内の人達の鷹山の復興への協力を促進させるという「ポジティブ・フィードバック」な関係が結んでいくのではないだろうか。

第5章 おわりに

現在、巡行参加を目指し動いている鷹山は、そのことによって町内にどのような影響を与えたのだろうか。本調査では、ソーシャル・キャピタルの概念を使用して、その影響を見てきた。鷹山の復興が始まったことによって、町内にソーシャル・キャピタル促進要因が生じて、それに伴って町内のソーシャル・キャピタル量も増加したと考えた。町内に関わる5名にインタビュー調査を行い、鷹山の復興によってソーシャル・キャピタル促進要因が生じたか、ソーシャル・キャピタル量が増加したかをみた。その結果、「あいさつ」、「興味・愛着喚起」、「多様な住民参加」の3軸に当てはまるソーシャル・キャピタル促進要因が生じたことが分かった。しかし、鷹山の復興の進め方が自主的に鷹山の復興に協力するのを待っているというものであるため、ソーシャル・キャピタル促進要因にならないことも分かった。さらに、鷹山の復興が「地域の魅力」とならずソーシャル・キャピタル促進要因にならない可能性があること、他の男女の縛りのない地域の活動と比較すると祇園祭の祭礼品授与や囃子方の活動は限定的で「多様な住民参加」と捉えられないことが分かった。そして、ソーシャル・キャピタル量についてだが、個人によって差が見られた。互酬性についての質問項目では、町内に住んでいるA氏が、他の4名に比較するとより感じていることが分かった。また、信頼とネットワークについては、公益財団法人「鷹山保存会」に所属して、より深く復興に関わっているA氏、B氏、C氏の方が、お互いが信頼しあっていると感じるようになったり、町内外でつながりができたりという風な鷹山の復興による変化を、より感じていた。そして、鷹山の復興の動きと町内のソーシャル・キャピタルは「ポジティブ・フィードバック」な関係性である可能性があることが分かった。

つまり、本調査では、現在巡行を目指している鷹山の復興の動きは、町内にソーシャル・キャピタル促進要因を生み出し、ソーシャル・キャピタルの要素である互酬性、信頼、ネットワークに影響を与えたことが確認できた。しかしその影響の与え方は個人によってばらつきがみられた。そして鷹山の復興の動きと町内のソーシャル・キャピタルは「ポジティブ・

フィードバック」な関係性を結んでいる可能性が出てきた。本調査では、鷹山の復興による変化の感じ方の差がどこから来ているのか不明であり、課題である。

最後に、本調査を行うにあたり、インタビューに快く応じて下さった5名の方に、この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

[参考 URL]

祇園祭、(2016年1月29日取得, <https://www.kyokanko.or.jp/gion/index.html>)

祇園祭・鷹山リンク、(2016年1月29日取得, <http://takayama.link/>).

[参考文献]

Putnam,R, 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press. (=2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版)

Putnam,R, 2000, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon&Schuster paperbacks. (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)

Wenger,E.,R.A.McDermott and W.Snyder,2002, *Cultivating Communities of Practice:A Guide to Managing Knowledge*, Harvard Business School Press. (=2002, 櫻井裕子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス——ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社.)

小松秀雄, 2008, 「祇園祭の山鉾町のアクターネットワークと実践コミュニティ」鯨坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』, 世界思想社, 58-77.

島田崇志, 2006, 『写真で見る祇園祭のすべて』光村推古書院株式会社.

鈴木佳菜子, 2016, 「鷹山の復興と伝統の継承」『社会調査実習報告書』149-165.

立木茂雄, 2007, 「ソーシャルキャピタルと地域づくり」『都市政策』127:4-19.

———, 2008, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域コミュニティの活性度と安全・安心」『都市問題研究』60(5):50-73.

———, 2011, 「ソーシャルキャピタルの視点から見た地域の安全・安心に関する実証的研究」『地域安全学会論文集』14:27-36

内閣府国民生活局, 2003, 『平成14年度 ソーシャル・キャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』

樋口博美, 2012, 「祇園祭の山鉾祭礼をめぐる祭縁としての社会関係—祭を支える人々—」『専修人間科学論集』2:113-125

廣田長三郎, 「鷹山の歩み」.

毎日新聞, 2016年6月8日

読売新聞, 2014年5月17日